

舞踏会の手帖 UN CARNET DE BAL 2016・4・25

1937年 仏 モノクロ

130分

監督 ジュリアン・デュヴィヴィエ

出演 マリー・ベル、フランソワーズ・ロゼー、ルイ・ジューヴェ、アリ・ボール、ピエール・リシャール・ウィルム、レイミュ、ピエール・ブランシャール、フェルナンデル

音楽 モーリス・ジョベール

(あらすじ)

イタリアの北部、コモ湖畔の大邸宅に住む未亡人のクリスティーヌ（マリー・ベル）は、夫の死後、社交界にデビューした16歳の時の舞踏会の手帖を発見する。魅る華やかな舞踏会の光景や、「一生あなたを愛し続けます」と耳元で愛を囁いた青年たちの声……。

20年を経て、彼女は手帖の男たちを訪ねる旅に出る。最初に訪ねたジョルジュはクリスティーヌの婚約を知って10数年前に自殺。狂った母親（F・ロゼー）は今も息子の帰りを待っている。二人目の文学青年のピエール（ルイ・ジューヴェ）は弁護士となったが、今はキャバレーの支配人で、裏の顔はギャングの親分。クリスティーヌの目の前で警察に連行される。次のピアニストのアラン（A・ボール）は彼女への思いを託した作曲を無視されたため、恋をあきらめて神父となり子供たちに聖歌の練習をさせていた。詩人エリック（ピエール・リシャール・ウィルム）はアルプスのガイドを務め、政治家志望のフランソワ（レイミュ）は大臣にはなれなかったが、今は町長。女中と結婚式を挙げようとしていた。マルセイユの工場地帯でクレーンの騒音に囲まれて暮らすティエリ（P・ブランシャール）はもぐりの墮胎医で半狂乱の廃人だった。彼女の生まれ故郷でトランプ手品の好きな美容師のファビアン（フェルナンデル）は、彼女を舞踏会に誘うが、現実の舞踏会は野暮ったいものだった。20年前に出会った青年は、皆当時の面影は消え失せ、人の世のはかなさを感じるだけである。失望したクリスティーヌは屋敷に戻った。そこで、最愛の恋人だったジェラルムがコモ湖の対岸に住んでいることを知り、訪ねるが、亡くなったばかりだった。亡くなった父に生き写しの息子を彼女は舞踏会に連れていく。白いカーテンに踊る男女のシルエットが舞い続ける。

(解説)

ジュリアン・デュヴィヴィエはこの映画の主題を「夢のはかなさ、過ぎ去った時の残酷さ」とし、それをオムニバス（乗合自動車）形式で表現した。未亡人クリスティーヌを演じたのは気品あふれる美貌のマリー・ベル。訪ねるかって愛を囁いた6人の男性に、当時のフランスを代表する一流の演劇界、映画界の重鎮を配し、加えてフランソワーズ・ロゼーが狂気の母親を演じて、これ以上ない贅沢な映画とした。まさに名優の競演である。旅を続けながらクリスティーヌは現実の残酷さを知る。映画の底を流れるのはペシミズムである。